



「黄砂の科学」

甲斐憲次 著

気象ブックス018

成山堂書店, 2007年6月
146頁, 1600円 (本体価格)
ISBN978-4-425-55171-2

成山堂から出版されている気象ブックスの18巻目である。縦書きの一般向け書籍として書かれており、書店で目にすることも多いであろう。本書の「はじめに」で著者は「黄砂の入門書であると同時に、黄砂のナラティブ (narrative, 探検記) でもある」と述べている。入門書として一通りの話題をカバーし、黄砂とアジアでの環境問題についての講義で教科書に使えそうな内容でありながら、類書とは趣を異にしたドキュメント調の記述が、「トピックス」と示された部分だけではなく本文中にも多々出現する。これも「はじめに」で著者が「研究や現地観測を実施する際の人間の側面にもふれた」と述べているように意図されたものである。そのため、多くの関係者が書中に登場し学会員にはそれもまた楽しめることと思う。人名に興味がなくとも、このドキュメント調の記述は、現場の雰囲気をよく伝え、気象学者の研究、あるいは一般化して科学者の研究とはどのように行われているのかを感じるためにも良い本であると思われる。その意味で、また教科書としては比較的少ない本文146頁という薄さからも、黄砂を勉強しようとする人だけでなく、一般の大学生や高校生にも薦めたい本である。

具体的に述べてみよう。本書は「第1章 大規模な黄砂現象—2000年4月」と具体例を挙げた導入部から始まり、「第2章 黄砂とは何か」で基礎的知識を示したあと、「第3章 黄砂の源を訪ねて」で著者が今まで携わった研究プロジェクトでの見聞記を示し、その後、黄砂に関わる話題を、砂塵嵐、黄砂の移動、黄砂粒子、発生源、タクラマカン砂漠、大陸内陸での環境変化と続けながら、黄砂に関する主要な問題を解説し、黄砂の全体像を構成する。その後「第11章 黄砂の予報と観測」で近年の各国の予報や研究の展望を語って話を締めくくっている。それぞれの章の最初にはその章の内容を示す短文がつけられており、また途中の各章の内容は独立しているの、興味をむくまま飛び回って読むこともでき、気楽に読みたい読者に

とっても親切的な構成となっている。更に、参考文献やWWW サイトリストが5頁に亘ってまとめられていることは、より進んだ勉強をしようとする読者にとって有益である。また図表や写真が多く掲載されていることも読みやすさに繋がっていて、細かいことを気にしないで読むのは短時間ででき、図表を含めて丹念に眺めると情報量が増え、その後の学習につなげられる本である。

本書では著者が参加した「黒河流域における地空相互作用の日中共同研究」「砂漠化機構の解明に関する国際共同研究」「風送ダスト」の3つのプロジェクトが大きく取り上げられている。それぞれの研究結果だけでなく当時の著者を中心とした研究者の様子が記述されている。

本書に特徴的な記述法は、たとえば「第4章 最大級の砂塵嵐・黒風」の冒頭の文「私は1990年3月2日—24日の3週間、河西回廊のオアシス・張掖をベースに砂漠化と黄砂に関する現地調査を行っていた。一中略— 張掖の空は驚くほど青く澄んでいる。」と旅行記として話を始め、夜に経験した嵐から翌朝見た黄砂、そして、そこで始めた観測へ、さらには現象の解説へと展開していくところに見られる。淡々と客観的に話を進める通常の教科書的書籍とは違い、文章と写真から著者の当時の興奮や行動の様子、現地の状況が伝わってくる。同様の現地ルポは、何も観測だけでなく、気象集誌投稿論文の査読結果を受け取った時の記述や、シンポジウムでの発表の記述にも見られ、経験者は共感でき、これから経験する学生には予習として役立つのではないだろうか。

単なる教科書としては余分とも言える内容をこれだけ詰め込みながら、前述の通り、黄砂を発生させる嵐の説明、黄砂の移動、黄砂粒子の解説などから、世界のダスト発生分布と気候、大陸での環境変化の問題、そして予報と広い範囲を記述していることも強調しておきたい。

なお評者も、著者の行った翌年、同じ河西回廊近くの砂漠に学生の身分で行っていた。実は、本書のごく一部に匿名で登場しているが、そのことは、この評者を書くために本書を通読して初めて知った。迷子になった者としては匿名に感謝する次第である。

(岐阜大学流域圏科学研究センター 玉川一郎)